

## 新資料紹介

### 川端康成 「生徒の肩に柩を載せて

### 葬式の日、通夜の印象」

(石丸梧平主宰「団欒」掲載)

宮崎尚子

はじめに

川端康成の「生徒の肩に柩を載せて 葬式の日、通夜の印象」を発見したので新資料として紹介する。

この資料は川端康成が大阪府立茨木中学校の五年生だった時、石丸梧平主宰の雑誌「団欒」に掲載され、「師の柩を肩に」として広く知られながら所在不明であった文章である。「川端康成全集」(新潮社)にも収録されていない文章であり、川端の文章が雑誌に掲載された最初のものでもある。

川端は後年、同じモチーフで「倉木先生の葬式」(キング昭和二年三月)と「師の柩を肩に」(「東光少年」昭和二十四年六月)という二つの作品を書いている。十九巻本『川端康成全

集』の年譜には「大正五年、国漢の教師山脇(満井)成吉の推挙で、なくなった英語の教師倉崎仁一郎を追悼した作文「師の柩を肩に」が、茨木中学で山脇成吉の同窓だった石丸梧平に送られ、大阪で彼が主宰発行してゐた雑誌『団欒』に抄載された。」と記されている。川端香男里氏は『川端康成全集』の解題において「この最初のかたちを一見してみたいと切に願つてはゐるものの、今日まで校訂者は、発表誌を手にしてゐない。勿論、著者の許からも現在まで見出されてゐない。」と述べている。今回紹介する新資料はこの「最初のかたち」に近いもので、初期の川端作品解明の為に看過できない資料であると言える。

改めてこの発見された資料を見てみると「大正五年」は大正

六年の誤りで、「師の柩を肩に」という題も「生徒の肩に柩を載せて」という総題であった。この題は石丸梧平の手による可能性が高く、これとは別に「葬式の日、通夜の印象」という題が附されている。この題が川端によるものかどうかはまだはっきり分らない。この作文が国語の満井教諭による指示であったならば、クラスに与えた題であった可能性も否定できないからである。また日誌という形であった可能性もあるが、これは今後調査していきたい。いずれにせよ、川端は題名も雑誌の発行年も間違つて書き記していたのである。このことが、雑誌「団欒」自体が希少で閲覧困難な資料であったことに加え、発見が遅れた理由につながつたのだと思われる。

また、川端の原文には石丸の添削が入っているものと思われる。しかし現時点ではどこまで石丸の添削が入り、どこまで川端の原文が生かされているかは不明である。添削を考える際は、この雑誌「団欒」が文字通り家庭雑誌であったという点も考慮していくべきである。

なお、この「生徒の肩に柩を載せて 葬式の日、通夜の印象」の様子は、茨木中学校の同窓会久敬会の「会報」第三十二号の別冊で臨時会報「故倉崎仁一郎先生追悼号」の内容と詳細に至るまで一致している。この追悼号に川端の名前は見られないが、茨木中学校の教員、久敬会の会員、卒業生、生徒、遺族たちの追悼文が一〇頁に渡り掲載されている。五年間受け持たれた五年級の生徒達の文章も掲載されている。「在校生涙の日誌」

と題され、第五年級は山本英雄「臨時五年級會」、中谷俊雄「葬儀の當日」、太田重英「東本願寺茨木別院通夜」、高谷圭三「一月二十九日」、田村正雄「一月二十九日」、松下久一「一月二十九日」の六人の文章が掲載されている。それによると、臨時五年級會にて葬式の人夫を願ひ出た事や、通夜には一旦帰宅した者も含め、皆が参加したことなどが記されている。この他の資料としては、川端の下級生であった大宅壮一の当時の日記にも触れられており、五年級全員で倉崎先生の棺を担いで葬列を成した事は間違いないようである。何よりも、この決議は生徒の自主的なものであったことが、周囲の人達を感動させている。同じように感動した石丸氏によつて「団欒」誌上で紹介されるに至つたのが掲載の経緯である。また、「会報」第四十八号には十七回忌という理由で倉崎先生の遺影が掲載されているので、見る事ができる。

以上述べてきたように、「生徒の肩に柩を載せて 葬式の日、通夜の印象」の扱いは慎重でありたいが、今回の新資料発見により、今後三作品の本格的な比較研究が期待される。また、「十六歳の日記」などの初期の作品はもとより、川端文学の虚構性を検証できる資料としても期待できる。以上のことから川端康成文学を解明する上で、貴重な資料であると言える。

【目次】

■團樂三月號目次□□□

□表紙畫

名越國三郎氏

□西洋名畫「第一課」

シーモア、ルーカス氏

□令嬢令息

□よい姉妹

□女子大學出身者の「母の會」

□可愛い令嬢

□生徒の肩に柩をのせて

□絞りの談話會

□生駒山中の盛花會

□小説挿畫 伊原宇三郎氏

■幸福とは何ぞ 顧問 谷本富(二)

■無病息災楽しい日常生活 別所彰善(八)

■日本人と今後の食物問題 醫學博士 木下東作(二三)

■天才畫家の面影 蒲原有明(二八)

■美術家希望の青年男女 菊池契月(三三)

■畫に志す人々へ(繪畫研究の第一歩) 鹽月桃甫(三六)

■男が「遊び」を感じる場合 櫻メント株式會社専務取締役

阪本巳之松(四六)

■女がヒステリーとなる場合 某醫學博士夫人(四八)

■女ヒステリー⇨男遊蕩 石丸喜世子(五〇)

■生徒の肩に柩をのせて 茨木中學生 川端康成(八四)

■姑に愛せられた嫁の實例 酒見富士子(四一)

■月給取りの娯樂の研究 箕面電鐵専務取締役 小林一三(五八)

■苦勞話と楽しい思ひ出 大阪區裁判所某檢事夫人(二四)

■團樂に入りし名妓(八千代桶彦結婚物語) 記者(六八)

○家庭圓満(木下博士) ⇨ 玩弄たる女でない(緒方博士) ⇨ 伊藤の御前さんと八千代さん(花外のお悦さんの話) ⇨ 謙遜

の女(日野辯護士) 彼の女の新しい生命(石丸梅外)

■婚禮の夕(長詩) 正富汪洋(六六)

■雛祭の話 徳島縣立高等女學校教諭 橋本龜一(六二)

■雛祭のお重詣 野田輝子(六五)

■甘くて気のきいた春の精進料理 石丸喜世子(一八)

■三月の總菜献立表二種 野田輝子(八三)

■なつかしい五十三次 東本願寺法王 大谷旬佛(七二)

■盛花の初稽古 大阪府立農學校講師 堀雲秀(七七)

■一ヶ月間の重なる社會の出來事 記者(八六)

□文藝雜話 石丸梅外(九〇)

□きのふの薔薇(長篇小説) 加藤朝鳥(九五)

□犬(短編小説) 広瀬文豪(二六)

□蓄吹く風(挿繪小説) 正富汪洋(八)

■故由上葉春氏の追懷 高橋源之助、釋超空、加藤朝鳥、阿部櫻畔、水仙花女、石丸梅外(一〇八)

□短歌と表現 安田青風(一一四)

□短歌(矢澤孝子選)(一一九)

□短歌(若山牧水氏選)(一二二)

□各地詠草(一二四)

□俳句（藤原游魚氏選）（二二五）

□各地句會報（二二六）

□親愛と感想（二二七）

□新刊紹介（七四）

□社告（二二九）

■謡曲婦人録（四六）

【口絵】

生徒の肩に柩を載せて

大阪府立茨木中學校教諭倉崎先生の葬儀

（写真上段）弔辞の様子。

（写真中段）花環などを持った生徒達の葬列の様子。

（写真下段）柩を担ぐ生徒達の様子。（解説宮崎）

先生の靈柩が其愛育された生徒の肩によつて墓場に送られたと云ふ消息を見て私は思はず涙の流るるを禁じ得なかつた。淳朴な茨木中學にして初めて見らるゝ眞心の現はれだとは云へ、故人の温情が如何に少年の胸に深く沁み入つて居たかが窺はれる。今の世には珍らしい情誼ではないか。かくてこそ人の子の教師となつたもの、眞の満足があるわけ。かくてこそ美しい子弟の道として人の世に歌はるゝわけであらう。筒袖に袴、脚絆は茨木中學の昔ながらの制服であるが。この制服のまゝの柩昇き。この制服のまゝの花持ちや提燈持ちお、いちらしき少年の、美

しき群よ。（石丸生）

【本文】

生徒の肩に柩を載せて

大正六年一月廿九日午前四時、大阪府立茨木中學校教諭從六位倉崎仁一郎先生は、突如腦溢血の爲めに逝去せられた。先生は明治二十八年茨木中學の創立早々來任し、爾來二十二年加藤校長を輔けて今日に及ばれたのである。先生は鳥根縣の人、英語と歴史とを専門とせられたが、生徒に對しては常に深い同情を以て接せられたので其教へを受けたものは何人も長く先生を忘るゝことが出来ないのである。左に掲げたる一篇は、同校の生徒にして最近まで先生の慈しみの下にあつた川端君の手に成つたもので、葬式前後の子弟の情誼が濃かに記されて居るから、特に乞ふてこれを採録する事にした。尚ほ巻頭の寫真は、私が十數年前の、同校に於ける同級の友にして今は同校の教諭兼舎監たる満井成吉君の厚意によつて寄せられたものである。其柩の、生徒の肩に載せられたるは、私の感慨措く能はざるものである。（梅外生）

葬式の日、通夜の印象

茨木中學校五年生 川端康成

□

「エッ！ほんとうか？」信ずるにはあまりの驚愕であつた。否むには、あまりに友の顔が蒼ざめて居た舎監室の満井先生の涙は更に此悲しむべき事實を信すべく強いた。

あ、我敬愛惜く能はざる倉崎先生は一月二十九日の未明、多くの人々の驚きと悲しみの中に突如として逝かれたのであつた。寄宿舎の大火鉢を圍んで居る若い人々の眼には落膽と失望との熱い涙が満ちて居た。學校に出ると控所のあちこちにも、しめやかな悲しいまどゝみが見られた。

實際、倉崎先生は二十有餘年我中學の爲めに何物をも顧みずに盡された方である。それだけ校長さまの信頼も厚かつた。殊に我々教へを受けたものにはその誠心を以て接せられた温情に對して、いつまでもく忘れることの出来ない懐しさが迫つて來るのである。然もこの突然の永別は、我々をして更に深く悲しましむるものがあつた。この訃音に接して、顔を蔽ふて慟哭とくしないものがなかつたのも自然の情である。

□

この日、武術の時間に、五年級の級會が道場に開かれた。議題は、倉崎先生の御長逝に對して我々の報恩の方法と云ふことであつた。涙に満ちた級友等は、如何にも感慨に絶えぬ態度で、いろく語り合つた。然しその方法があまりに複雑になつたので「葬式當日に於て」と云ふことに限られた。それにもいろ

くの相談が出たが、質素は學校の主義でもあり、故先生の遺志でもあるからと云ふので、先づ第一に葬式當日の凡ての人夫を我々に於て引受けやうではないかと議が纏つた。それは私たちに取つて、其眞心を現はすに最もふさわしい尊いものであつた

□

先生がなくなられた朝、その日の教室では他の先生がたから種々故人の履歴や逸話の一端を聞いたが其夜の寄宿舎の靜座の時間には加藤校長から更に詳細なお話を承つた。尚ほ三十日葬式當日の午前、五年級一同は講室に集つて、濱田先生から御臨終の有様などを承ることが出來た。土曜日にはいつになく「死」と云ふことや御自身の子達の教育のことや、その上生徒の誰彼のことまで—— MとKとは身體が虚弱だから、誰々はどうしてやりたいなどと、しんみりしたお話があつたとのこと、私たちは思はず涙に曇つた。實際先生は生徒のことをいつも頭に置いて居られる人であつた。學年の末に一人の生徒を落第させるにも、多くの御心使ひがあると云ふことは兼々聞いて居るところであつた。

□

冬の午後、寒い風が吹いて、淡い太陽の光が悲しく照つて居る。質素な、然し嚴肅な葬式の列が淋しい町並を抜けて茨木別院に向ふのであった。幡、提燈、生花、花環、楡などすべて和服に脚絆の制服制帽の生徒たちの手にあつた。更に先生の靈柩は、哀慕に沈む五年級生徒の肩にあつた。斯うした嚴肅な葬列は、町の人々に珍らしく映つたらしかつた。一般の會葬者にも此師弟の温情を痛く感激せしめたやうであつた。柩につゞく遺族の方々、茨木中學職員、校友の久敬會員など、いたましい心に閉された靜かな葬列は可なり長かつた。卒業生がこれほど多數に集まつたことは、學校の創立以來見る事がなかつたとのことであつた。

葬場に於ける最後の別離は更にいたましかつた。廣い堂内にも會葬者は一ぱいであつた。在學生は椽端に滿ちて居た。禪僧の引導の後、加藤校長、天坊先生、滿井先生、久敬會總代、在校生總代などの弔文朗讀は、また新なる涙を誘ふのであつた。

□

葬式の夜、私たち一同は茨木別院で通夜をすること、なつた。それは故先生の、山陰に居られる兄君と、遠く嫁がれて居る長女の方とが、雪の爲めに未だお着きにならないので、お二方の永別を告げられるまで、茶毘に付することを待つ事になつたのである。そして今夜はこの別院に故先生の遺骸を護らねばなら

ぬのだが、唯職務の爲めの番人の、冷たい手に委せて置きたくないと云ふのが、この通夜の動機であつた。

本堂の黄色い障子と柩をめぐらす白い幕とが、集まつたもの、心をしめやかにする。夜を徹しても尚ほ明日の授業に差支へない強いものだけ——と云ふことであつたが、夕暮の汽車が着く度に高槻や山崎や吹田などから皆が集つて來た。故先生の保證によつて學籍を保ち得たYも見えた。健康を氣づかわれたMも來た。斯うした人々の口からまたも故先生の逸話や噂がくり返し語られた。入學試験も話題に上つた。夜が更けると、幹事の心づくしでうどんの御馳走などがあつた。

やがてF君の發議で、F君が導師となつて、お寺生まれのHやSやT君の讀經が捧げられた。皆が頭を垂れ手を合せて柩前に詣でた。蠟燭の火がゆら、ゆらと淋しくゆれて寒い夜がだん／＼更けて行つた。

#### 【奥付】

##### 團樂定價表

普通號 一冊 金拾八錢（郵税一錢五厘）

特別號 一冊 金廿五錢（郵税二錢）

六冊 合計 金壹圓參拾貳錢

▲團樂の會員になつて下さる方は本社へハガキで其旨を御通知下さいませ。會費は半年分壹圓十錢アトから集金郵便で集めることに致します。又會員の方は本社の音樂會その他の會合

にご招待致します。

◎團樂廣告面 字詰は五號活字一行廿三字詰一段卅行一頁二段六十行にて木版を要するものは別に實費を申受くべし其料金及等級等は御照會次第詳細回答可致候

大正六年二月廿七日印刷納本（毎月一回一日發行）

大正六年三月一日發行

大阪府豊能郡熊野田村三〇七七番地

發行兼編輯人 石丸五平

東京市京橋區弓町十三番地

印刷人 柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十三番地

印刷所 千代田印刷株式會社

大阪府豊能郡熊野田村三〇七七

發行所 團樂社

振替口座大阪三一―三三七番

東京市外、大久保百人町三五五

團樂社

【附記】

財団法人川端康成記念会の川端香男里氏から「これで永年の宿題がひとつ解けた感じがいたします。」というお言葉を賜りました。また、川端康成文学館館長田中洋子氏には「故倉崎仁一郎先生追悼号」の複写で大変お世話になりました。ご協力ご教示頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

（みやざき なおこ）

大学院文学研究科第二十六回修了／尚綱大学



「団楽」第三卷第三号・口絵



「団楽」第三卷第三号・表紙



「生徒の肩に柩を載せて」本文